

令和8年度
入学試験問題

第3回

国語

- 1 問題用紙は監督者かんとくしゃの指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入してください。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点くとうてんや符号ふごうは一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから16ページまであります。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	------------	--

森村学園中等部

□ ① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 日本における、室内での履き物を脱ぐ習慣は、なかなか変化しない。このことは、住まいのしきり装置とも深くかわっている。日本の住宅の玄関には、いまだに靴を脱ぐ* たたきがあり、* 式台(敷台)こそないが、わずかながらでも* 上がり框がついている。そこで靴を脱ぐことが暗示されているのである。仮に、玄関のたたきの素材がそのまま居室につながりまったく段差がない場合、どこで靴を脱ぐのが曖昧になる。

玄関の戸が現在では引き戸ではなく、ほとんどがドアになった。しかし、欧米と同じようなドアでありながら、欧米と異なっているのは、外開きであることだ。ドアを内開きになると、玄関で脱いだ靴がドアを開いたときに引っ掛かってしまうからである。もちろん、ドアが引っ掛からないほどに広い玄関であれば問題はないのだが、それでも外開きになっているのは、靴脱ぎの習慣があるからだ。

わたしたちは、靴(履き物)を脱ぐことで、外部から内部に入ったと無意識に感じている。もちろん、現在では公共的な建物や商業的な建物では、室内でもほとんどが靴を脱がないようになっていて、靴を脱がない室内空間は、いわばパブリックな場であるとわたしたちは認識している。住まいから一歩外に出ると、パブリックな空間である。それは道路からオフィスや商業施設などへとつながっている。そうしたパブリックな空間から帰ってくると、再び、靴を脱ぐ。住まいでは、ほとんどが靴を脱ぐ。したがって、ある住まいから他の住まいへ行くときも、途中のパブリックな空間は靴を履いて歩いていく。靴はまるで、パブリックな空間を渡っていく船である。

わたしたちは、屋外にいても履き物を脱ぐことがある。 A 花見のゴザやそのほかの敷物の上では履き物を脱ぐ。現在では、花見は、段ボールの敷物というのが少なくない。それでも段ボールの上では履き物を脱いでいる。屋外に敷物を敷くことは、日本ばかりではなく、欧米でも行われる。敷物の上で食事をするピクニックのシーンを映画などで目にする。しかし、欧米では敷物の上で靴を脱ぐという事はなさそうだ。わたしたち日本人にとっては、段ボールも畳に代わるものとして意識されているのである。敷物一枚であっても、それによってしきられた場所は、ただの屋外ではなく、座敷のようになる。

履き物を脱ぐことには、外の汚れを部屋(内)に持ち込まないという気持ち微妙に働いている。外よりは、土間の方が上位であり、清潔であり、土間よりも板の間の方が上位であり清潔である。そして板の間よりも畳の間の方が上位にあり清潔だ。こうした感覚は、たとえば、近代になってからのことだが、板の間ではスリッパのような上履きを使うが畳の間ではそれを脱ぐといった習慣にもそうしたしきり意識を見ることが出来る。また、部屋にも座敷、廊下、台所、風呂、トイレなどに上下のしきり意識がある。現在でも、トイレではスリッパやサンダルを履き替える習慣を残している公共施設がある。トイレのスリッパやサンダルは、おそらく、古くからある下駄のような高足駄の習慣からきているのだろう。平安時代の絵巻物『餓鬼草紙』には、高足駄をはいて排泄する場面が描かれている。この履き物は、歩くための履き物ではない。不浄な場所では特別な履き物を履くという感覚がそこには見られる。

ともあれ、外から内に入った時に、履き物を脱ぐことは、清潔感や汚れ、あるいは浄不浄感とかかわっている。靴を脱ぎ部屋に入り、スリッパを履き、そして畳の部屋ではスリッパも脱ぐ、B 時としては、トイレで専用の履き物を履く。^④こうした感覚は、欧米人にはなかなか理解できないかもしれない。

日本人にとっての履き物に対する意識は、いったいどのようなものだろう。

(中略)

黒田日出男は履き物を脱ぐということについて、興味深い指摘をしている。

「道を行く旅人がはきものを脱ぐのは、宿に着いたときだけではなかった。

すなわち、ある場合には象徴的に^⑤ 沓を脱ぐ行為がなされた。それが『沓掛』である。地名として有名なのは長野県の沓掛であるが、もと

よりそこだけではない。地名事典を引けば、全国各地に『沓掛』が分布していることを確認できる。

『沓掛』とは、

『元来、峠の入り口に祭る山の神や道祖神などに、馬の沓や草鞋を掛けて奉納し、祈願する習俗』
に由来している地名なのである。つまり、『沓掛』は峠や山道を無事に通れるように神に祈願する行為として考えられる。

道というのは、決して均質でのつべらぼうなものではない。道にはさまざまな境・仕切りがある。国・郡の境、莊園や村の境、平地と山間部の境……といったように、さまざまな境界があった。そうした境を越えるとき、人々ははきものを脱ぎ、それを木に掛けるなどして無事な通過を祈願したのである。

草鞋を脱ぐことは、そうした道の境を越えるための象徴的行為なのであり、旅人は、それを行うことによって道を旅することができたのであった」(黒田日出男「道で沓を脱いだ人々」『日本人とすまい1・靴脱ぎ』より)

履き物を脱ぐことが、わたしたちの生活の中では象徴的な行為であるというのである。さらに、「日々、われわれはなにげなしにはきものを履いたり脱いだりしている。しかしそれは、本来的に越境のための象徴的作法なのである」と黒田は結論している。履き物は、やはり「しきり」を越えることと深くかかわっているらしいのである。ということは、家の中に入る時に、履き物を脱ぐのは、やはり決定的な「しきり」を越えていく行為としてあるのではないか。

(中略)

ところで、外出先から帰って、家に入ると、まずは履き物を脱ぎ、次に何をするか。もちろん、靴などの荷物を置くといったことはするわけだが、あらゆる人にあてはまるかどうかはわからないが、^⑥多くの人は手を洗うのでないか。外から帰ると手を洗う。これは、近代の衛生思想の

普及ふきゅうのせいともいえるが、お寺てらなどでも、境内けいだいには手水ちようすずがあり、柄杓ひしやくで手を浄きよめる習慣しゅうかんがある。また、茶庭ちやていには蹲踞つくばいと呼ばれる石の手水鉢ちようすずばちを置く。

手を洗あらう（浄きよめる・清きよめる）という行為けいゐは、C 衛生的ゑいせいな行為けいゐではあるが、その行為けいゐによって外そとの世界せかいから内うちの世界せかいに入ったことを意識いしぎする行為けいゐでもあるように思おもえる。履はきき物を脱ぬぎ、手を浄きよめることによつて、内うちと外そとの境界けいがいを越こえるのである。

衛生ゑいせいは、科学的がくせいな概念がいねんであると同時に、きわめて文化的ぶんかかつ感かん覚かく的な概念がいねんでもある。それは清潔感けいせつかんや浄きよ不ふ浄じやうの感かん覚かくとも重かさなり合あっている。

かつて、^④異常いじやうなまでに潔癖けつへきな清潔感けいせつかんを持つ学生がくせいがいて、驚おどろかされたことがある。外そとから帰かへると、自分おのれの寢室しんしつには、一切いっけつ、外そとで身みにつけていたものを入いれないというのである。靴くつや外出着でかけはもちろん、下着したぎ一枚まいも入いれないというのだ。寢室しんしつには裸はだかで入いって、寢室用しんしつようの衣服いふくに着替きえるというのである。外そとの世界せかいがきわめて汚きたいと感かんじているのだろう。外そとの世界せかいに出て行く時ときに着きている衣服いふくはまるで宇宙服そんすいふくか潜水服せんすいふくのようなもので、家いへに帰かへると脱ぬぎ捨すてるのである。こうした潔癖感けつへきかんは、おそろく生活せいかつに不便びへんであろう。

しかし、外そとから帰かへって手を洗あらうということ、わたしたちは外そとの汚きたれを落おとして内うちに入る。この汚きたれを落おとすという行為けいゐは、科学的がくせい合理性ごうりせいとともにきわめて感かん覚かく的なしきりの行為けいゐとなっていることをおもえば、すべてを脱ぬぎ捨すてる学生がくせいほどではないが、わたしたちのなかにもそうした感かん覚かくがなくはないといえるだろう。

（柏木博かしわひろし 『しきり』の文化論ぶんかろんより）

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

（注）

* たたき……………玄関げんかんを入れてすぐの、靴くつを脱ぬぐ場所ばしょの下のコンクリートやタイルなどで舗装ほさうされた部分ぶぶん。かつては土つちを固かめていた。

左図の①

* 式台しきだい（敷台しきだい）……………上あがり框かまち（後述こうじゆ）の下したに設たけられる、一段低ひくなった板いたのこと。靴くつを脱ぬぐ際に腰掛こしかけたり、荷物にものを置おいたりする。

左図の②

* 上あがり框かまち……………たたきと室内しやういん、もしくは、式台しきだいと室内しやういんの床ゆかの境さかいにある段差だんさのこと。

左図の③

* 沓くつ……………靴くつのこと。



③上がり框

②式台

①たたき

問一 ——— ① 「日本における、室内での履き物を脱ぐ習慣は、なかなか変化しない。このことは、住まいのしきり装置とも深くかかわっている」とありますが、このかわりを示したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 日本住宅の玄関にある段差は、そこで外部の人間に強制的に靴を脱がせることを指示する目的で設計されている。

イ 日本住宅の玄関は、靴を脱ぐための空間をとるため、諸外国と比較して土間の面積が広くなるよう設計されている。

ウ 日本の住まいでは欧米化が進んでいるが、玄関のせまさを解消するために戸が外開きになるよう設計されている。

エ 日本家屋の玄関にあるたたきなどは、外から内へ入る際に靴を脱ぐという日本の習慣を前提として設計されている。

問二 ——— ② 「靴はまるで、パブリックな空間を渡っていく船である」とありますが、これはどのようなことをたとえた表現ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 船が移動する人々を陸から陸へ運ぶ乗り物であるように、靴は住まいという私的な場と公的な空間を行き来するための移動手段であるということ。

イ 船がないと人は危険な海を越えることができないのと同じように、靴を履かないと人は住まいの外の汚れた空間を歩くことはできないということ。

ウ 船が海を越えて陸と陸との間を結ぶ乗り物であるように、靴は私的空間から別の私的空間へ行く際に、その間の公的空間で履くものであるということ。

エ 船が移動した先の陸上では役割を持たないものであるのと同じように、靴はあくまでも外の空間でしか使い道のないものであるということ。

問三 ——— ③ 「こうした感覚」とありますが、これはどのような感覚のことですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問四

A

C

 に当てはまる語として適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たしかに イ ただ ウ いわゆる エ たとえば オ しかし カ さらに

問五 ——— ④ 「こうした感覚は、欧米人にはなかなか理解できないかもしれない」とありますが、その結果、たとえばどのようなトラブルが起これると予想できますか。その具体例として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 部屋を用途に依じて使い分ける習慣が理解できず、畳の間にソファを置いて居間にするような間違いが起こる。
- イ 部屋と部屋との浄不浄の關係がわからず、トイレのサンダルで家の中を歩き回るといような間違いが起こる。
- ウ トイレが不浄の空間であることがわからず、用を足した後に手を洗うという衛生的な行為を軽んじる問題が起こる。
- エ 日本での靴を脱ぐ習慣を忘れて、自国の習慣から土足で部屋に上がってしまい、室内が汚れるという問題が起こる。

問六 —— ⑤「多くの人は手を洗うのではないか」とありますが、筆者がここで「手を洗う」ことを話題にしたのには、どのような意図がありますか。その説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 手を洗う習慣を話題にすることで、履き物を脱ぐ行為が衛生的な行為であるだけでなく、境界を越える意識をもたらす行為であるという自分の考えを補おうとしている。
- イ 手を洗う習慣を話題にすることで、不浄をいやがる感覚が行き過ぎた衛生思想を生み出し、潔癖ともいえるほどの異常な清潔感を招く恐れがあることを指摘しようとしている。
- ウ 手を洗う習慣を話題にすることで、家の中に入るときには靴を脱いでから手を洗うというような衛生面での一般的なマナーが、日本人の一人一人の間で定着していることを示そうとしている。
- エ 手を洗う習慣を話題にすることで、世界的に見ても衛生意識が高いといわれる日本人が、靴を脱ぐことにとどまらない清潔さを昔から持ち続けていることを伝えようとしている。

問七 次の選択肢は本文中の~~~~~①から~~~~~④の記述について説明したものです。その内容として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ①「花見のゴザやそのほかの敷物」に似た敷物は欧米でもピクニック等で使用するが、その際には靴を脱がないため、欧米人には家の内と外との空間的な区別はないと結論づけている。
- イ ②「平安時代の絵巻物『餓鬼草紙』」を引用することで、日本では千年以上前から公共の空間において一つの履き物を共同で使用していたことを指摘している。
- ウ ③『沓掛』という習俗を手掛かりにして、靴を脱ぐという行為には、旅人が境界を無事に通過できるようにと祈りをささげる意味合いもあったと指摘している。
- エ ④「異常なまでに潔癖な清潔感を持つ学生」は、生活に支障をきたすほどの極端な例であり、我々との共通性は見出しがたいが、教訓として参考にすべきだと結論づけている。

問八 ——「玄関の戸が現在では引き戸ではなく、ほとんどがドアになった。しかし、欧米と同じようなドアでありながら、欧米と異なっているのは、外開きであることだ」とありますが、日本の「玄関の戸」が「外開き」であることに関連する次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本の家の玄関は「外開き」が多いのですが、家の中のドアはさまざまです。例えば、部屋のドアが廊下側に開く「外開き」もあれば、部屋側に開く「内開き」もあります。

トイレのドアは、万が一トイレの中で動けなくなった場合に救助しやすいように「Ⅰ」が多いようです。

また、公共施設やホテルなど、大きな建物の中に複数の部屋があるところでは「Ⅱ」が多いです。その理由は、災害時などに緊急避難経路の妨げにならないようにするためです。万が一災害が起こった場合、複数の部屋のドアが「Ⅲ」だったら、緊急避難経路となる廊下に向かってドアが開いてしまい、避難の妨げになってしまうからです。

また、雪国では積雪のためドアが開けられなくなってしまうため、「Ⅳ」になっているところもあるようです。

(琴葉「日本の玄関や出入口のドアはなぜ『外開き』なの？『内開き』との違いとは？」日本文化研究ブログ Japan Culture Lab より)

- Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ
- | | | | | |
|---|-------|-------|-------|-------|
| ア | ⅠⅡ内開き | ⅡⅡ外開き | ⅢⅡ内開き | ⅣⅡ外開き |
| イ | ⅠⅡ内開き | ⅡⅡ内開き | ⅢⅡ外開き | ⅣⅡ外開き |
| ウ | ⅠⅡ内開き | ⅡⅡ外開き | ⅢⅡ内開き | ⅣⅡ内開き |
| エ | ⅠⅡ外開き | ⅡⅡ内開き | ⅢⅡ外開き | ⅣⅡ内開き |
| オ | ⅠⅡ外開き | ⅡⅡ外開き | ⅢⅡ内開き | ⅣⅡ内開き |
| カ | ⅠⅡ外開き | ⅡⅡ内開き | ⅢⅡ外開き | ⅣⅡ外開き |

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「今度の日曜日、あたしのお誕生日会やるから、みんなで来てね」

と、好恵から誘いを受けたのは、まだ四年生も（^A）（ ）についていない六月のことだった。

誕生日会は私たちのビッグイベントだ。グループの誰かが誕生日を迎えるたび、私たちはその誕生日会に必ず出席し、自分のときにもグループ全員を招待する。それが仲間内の*不文律となっていたから、好恵が誕生日会を開くのもごく当然のことだった。

にもかかわらず、好恵からの招待を受けたとき、私たち五人は皆、「あれ」という感じで黙りこんでしまった。今年も好恵の誕生日会はないかもしれないと思っていたからだ。

一年前の六月十日、真っ先に九歳を迎えた春子に次いで、当然、開かれるものと思っていた好恵の誕生日会は、「お母さんが病気になったから」の一言でお流れとなった。私たちはしかたなしにプレゼントだけを渡して（^B）（ ）を濁したけれど、ケーキもごちそうもプレゼントのお返しもない誕生日はひどく味気なかった。

「お婆さんの病氣、治ったんだね」

「好恵んちのお婆さん、電話に出るとちよつと怖いけど、でも良かったよね、お誕生日会できて」

「うん、うん。プレゼントあげるだけじゃ、いったい何のためのお誕生日会かわかんないもんね」

「おいおい、何のためだよー」

今年も捨ててかかっていた誕生日会の復活に、私たち五人は胸をときめかせた。お誕生日会。その響きだけで無条件に高揚できた年頃だ。そしてその高揚はプレゼントの買い出しで絶頂を迎えることになる。

（中略）

銘々がうりポンをかけた包みを抱え、私たちは満ち足りて家路についた。そして一夜明けた翌日、再びその包みを手に、初めて好恵の家を訪ねた。

町外れの坂上に建つその家は、原色に近い屋根のブルーと外壁のオフホワイトが一見洋風で、当時よく耳にした「モダン」という言葉がよく似合った。軒先には二台の自転車が整然と、ブロック塀に並行してきっちりと停められていて、庭のプランターの配列にも乱れが見つからない。当然のように家の中もすっきり整頓されていたけれど、しかし、そこは誕生日会の会場にしてはあまりにもすっきりしすぎていた。

色鮮やかな飾りの施されたりビングを期待していた私たちが通されたのは、玄関わきの階段を上った好恵の部屋で、そこにはなんの装飾もなければ、ごちそうの匂いもなかったのだ。「あらあらみんな、今日はどうもありがとうねえ」と、甘い声で出迎えてくれるお婆さんの姿もない。

どうもおかしい。ごちそうのために朝食を抜いてきた私たちは、もじもじと顔を見合わせた。まさか。そんな。いや、ばかな。黙りがちの私たちの中で、好恵だけがただ一人、普段以上にニコニコと嬉しそうにはしゃいでいた。

リーダー格の春子がしびれを切らしたように「プレゼント」と声を上げたのは、ただ好恵のおしゃべりをきくだけで一時間近くが経過した頃だ。

「そろそろプレゼント、渡そうよ」

この場に展開をもたらすことで、パーティーの始まりをうながすような言い方だった。

しかし、私たちが次々にプレゼントを渡し、そのたびに好恵が歓声を上げて、とうとう最後の包みが開かれても、ケーキとごちそうは一向に姿を現さなかった。

「好恵、ちよつと」

階段の下からおばさんの声がしたのは、すっかり無口になった私たちに、さすがの好恵も言葉少なになった二時すぎのこと。その少し前に玄関の戸が軋む音をきいたから、おばさんは私たちへのお返しでも買いに出たのかもしれない、とにわか希望が射してきた。が、それもつかの間にすぎなかった。

「ちよつと待って」と階段を下りていった好恵は、数分後、ごちそうのお皿一つ運んでくるでもなく、ただ赤い目をして戻ってきたのだ。

「好恵、どうした」

「なんかあったの」

私たちが何をきいても答えず、戸口に立ちつくしたまま泣きそうな顔をしている。こんな好恵を見るのは初めてで、どうすればいいのかわからずにいると、やがて背後からおばさんが顔をのぞかせ、私たちの一人一人を見回しながら言った。

「うちはね、誕生会はやらないことになってるの。お姉ちゃんも、弟も。だから、好恵が何言ったか知らないけど、今日は帰ってね」

(中略)

冗談じゃない！

と、私たちが激昂したのも無理はなかったと思う。子供心にもそれはあまりに道理の通らない話だったのだ。

(中略)

興奮冷めやらぬままみんなと別れた私は、家に帰るなり、おさまりのつかない怒りを母にぶちまけた。

「ねえねえ、きいてよ、好恵ってばさあ」

一部始終を話すと、母は難しい顔をして、「紀子の気持ちはわかるけど、好恵ちゃんの気持ちは考えてあげなさい。こういう話は人に広めちゃだめよ」と釘をさした。私は「わかった」とうなずき、食器棚にあった菓子パンを嚙りながら階上の姉の部屋を訪ねて、再び怒りをぶち

まけた。

その頃はまだコードレスフォンなんてものもなく、電話とは一家に一台、家族の集う部屋の電話台に鎮座しているものだったから、こっそり友達に電話できないのが残念だったものの、姉の部屋で菓子パンを平らげた私は、裏の通りにクラスメイトの女子が住んでいることを思い出した。さほど仲は良くないが、まあこの際、誰でもいい。私はすぐさまその子の家を訪ね、心ゆくまで怒りをぶちまけた。

食べ物への恨みとは本当に恐ろしい。

この日、そうして鬱憤を晴らしていたのは私だけでなく、グループの五人が全員、友達に電話をしたり会いに行ったりと似たような行為に走っていたのだ。

結果、その翌日の四年三組に誕生会の一件を知らない者はいなかった。

③ここに一つの誤算がある。

私たちは好恵の悪口を言いふらすことで、彼女の評判を貶め、クラスのみんなを味方につけようともくろんでいた。そこには、願わくば好恵を仲間外れにしてやりたいという悪意も潜んでいただろう。しかし、みんなは私たちの話をきいても、当然ながら私たちほど腹を立てず、それどころかむしろ好恵に同情的だったのだ。誕生会でプレゼントをあげたのに何も食べさせてもらえず追い返された五人より、意地悪なお母さんに誕生会をしてもらえない一人のほうが、第三者の目には遙かに不憫に映るらしい。私たちがどんなに空腹だったかを訴えても、それは彼らの琴線をくすぐるに及ばず、彼らの哀れみは涙を浮かべて耐えていた好恵一人に集中した。

しかも、相手は普段、人一倍にぎやかな好恵である。いつもは元気な女の子の意外な側面。それは男子たちの好恵熱をより一層煽りたて、好恵を嫌っていた女子たちの態度をも軟化させた。

私たちの撒き散らした中傷は、帰するところ好恵から何も奪えず、かえって彼女に欠けていた何かを埋めて終わったのだ。

完敗だった。世論に敗れた私たちは、再び好恵を受け入れるしかなかった。クラス中を敵にまわさないためには、誕生会のことは水に流したふりをして、以前と変わらぬ関係が続けるほかはない。

(中略)

そこで、ひそやかな復讐を企てた。

「好恵とは一応、仲良くする。でも、もう私たちのお誕生会には呼ばない。お誕生会の恨みはお誕生会で返すべきだし、それに、休日のパティーまではクラスメイトの目も届かないから」

最初、春子がこの復讐案を口にしたとき、私はなんとという妙案だろうとすっかり感心した。誕生会の恨みを誕生会で返すというのは確かに

道理にならなっているし、あれだけのことをされたのだからこれくらいはして当然と、私たちは全員一致で好恵を今後の誕生日から締めだすことを決議した。

⑤ 自分のうかつさに思い至ったのは、その決議から数日が過ぎてからのことだ。

私は肝心なことを忘れていた。

グループで二番目に十歳を迎えた好恵に続く、三番目の十歳。

好恵に最初に手を下すイヤな役まわり……。

そう、私は三週間後に誕生日を控えていたのだ。

七月八日。七夕の翌日にあたる私の誕生日は日曜日だった。(中略)

しかし、私は疲れきっていた。

好恵を誕生日から締めだすことに決めたあの日から三週間、私は人の視線とはこんなにも怖いものかと思う知らされながら過ごした。いつ、好恵に誕生日のことをきかれるのか。いつ、好恵は自分が誕生日に招かれないことを悟るのか。私は絶えずびくびくと好恵の視線ばかりを気にしていたのだ。

好恵に「おはよう」と声をかけられるだけで、私は招待状の催促でもされたように顔を赤くした。会話の途中で沈黙が訪れるたび、「ところで、紀ちゃんのお誕生日だけ……」と切りだされるのではないかとどぎまぎした。毎日が緊張の連続。七月八日が近づくほどにその緊張は高まっていった。

これほど自分が小心者とは知らなかった。復讐がこれほどの苦痛を伴うものとも知らなかった。ついに誕生日を迎えたその日、だから私は誕生日やプレゼントの喜びより、ようやくその苦痛から解放される喜びのほうが大きかったのだ。

(中略)

みんなの帰った後、急にがらんとした部屋の中で、私は一気に脱力した。もらったプレゼントをしまうのも億劫で、その場に散らかしたまま二階へ上がると、部屋のベッドにどてつとうつぶした。甘いケーキの味はとうに忘れ、苦い後味ばかりが残っていた。

一生に一度しかない十歳の誕生日。

もう永遠に取り戻せない特別な一日。

好恵はあの日、どんな思いで十代への第一歩を踏みだしたんだろう。

そして今日はどこで何を思い、過ごしていたんだろう。

誕生会の終了と同時に、私はこの胸のもやもやから解放されるはずだった。なのにもやもやは増す一方で、まぶた瞼の裏に焼きついた好恵の視線は尚も私を苦しめる。ついてない、と思った。私の誕生会が七月八日でなかったら、秋や冬の終わりのほうだったら、私は例年通りに何も考えず楽しい一日を過ごしていたはずだ。一年で一番幸せなはずの一日。なのに、好恵の次に生まれたばかりにすべてがだいなしになってしまった。ついてない。ついてない。ついてない……。

「紀ちゃん」

と、そのとき、襖のむこうから姉の声がした。

入るよ、とノックもせずに見えた姉は、ベッドに伏せた私のもとへずかずかと歩みより、黄色いリボンのかかったたんぽぽ文具店の包みを差しだした。

「今、家の前であんたの友達みたいな子に会ってさ。これ、あんたに渡してって」

「え」

「直接渡せばって言ったたら、自転車に乗っていつちゃった」

私は声もなくその包みを受けとった。姉が去ってからリボンをほどくと、包装紙にくるまれていたのは須田さん並みに豪華なサンリオ商品のセツトだった。私の好きなリトルツインスターズのメモ帳もある。

「……………」

⑥気がつくとも、足が勝手に私を運んでいた。私は階段を駆け下りて玄関をくぐりぬけ、庭先の自転車に飛び乗った。

⑥自転車は私を好恵の家へ運んだ。

①風も、地面も、すべてが私をそこへ運んでいく気がした。

(森絵都『永遠の出口』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注)

* 不文律……………あんもく 暗黙の了解となつてゐる決まり。

* 激昂……………げつじやう 感情が高ぶること。いきりたつこと。

問一 ― A 「() についていない」・ B 「() を濁した」は慣用句である。() () に当てはまる言葉を次の

【 から選んで答えなさい。またその意味を後の から選び、それぞれ記号で答えなさい。

言葉

【 水板 顔場 空気 お茶 】

意味

- ア 相手の状況を理解し、共感すること
イ 念を押したり、何度も確認したりすること
ウ 状況をはっきりさせずにその場を適当に取り繕うこと
エ あやまった行動を指摘し、しっかりと注意すること
オ その状況や役割にまだ慣れておらず、ぎこちない様子

問二 ― ① 「黙りがちの私たちの中で、好恵だけがただ一人、普段以上にニコニコと嬉しそうにはしゃいでいた」とありますが、この場面

から読み取れる「私」たちと好恵の様子として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 簡素で整然とした好恵の部屋に通された「私」たちが戸惑いを感じている一方で、好恵はそんな友人たちの気分を盛り上げようと楽しそうに振舞っている。

イ 今日の主役である好恵にプレゼントを渡すタイミングを計りかねた「私」たちがそわそわと落ち着かずにいる一方で、好恵は友人の来訪そのものを純粹に喜んでいる。

ウ 誕生会らしい雰囲気もごちそうもないことに「私」たちが困惑している一方で、好恵は自分の誕生日を友人と共に過ごせる喜びで感情が高ぶっている。

エ 華やかな装飾もない誕生会を「私」たちが不審に思う一方で、好恵は形式にはこだわらず、友人に誕生日を祝ってもらえることから感謝している。

問三

- ②「母は難しい顔をして」とありますが、この時の母の様子を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 娘の不満を理解しつつも各家庭にはそれぞれの方針があるため、娘にもそれを理解させ、好恵の立場を考えるように諭そうとしている。
 - イ 好恵の家での娘への対応は不満を持って当然だと思いつつも、娘に同調するのは親としてすべきではないと感じている。
 - ウ 友人の誕生日を祝うことが本来の目的なのに、そこでもてなしが十分でなかったことに不満をもち娘を非難している。
 - エ 娘の好恵に対する不満や言い分をもっともだと思いつつも、誕生会をやらないうという考えを持つ母親がことへの理解に苦しんでいる。

問四

- ③「ここに一つの誤算がある」とありますが、「誤算」とは「物事を進める上での計算違いや見込み違いによって失敗や意外な結果が生じること」です。ここでの「見込み違い」とはどのようなことですか。その内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 好恵を仲間外れにしようと思っていたのに、その「私たち」のたくらみがクラスのみんなに感づかれていたこと。
- イ 好恵をおとしめようと思っていたのに、かえって意地悪な母に耐える好恵の評価を上げてしまったこと。
- ウ 好恵の評判を落とそうと思っていたのに、「私」たちよりも好恵の方がクラスのみんなからは好かれていたということ。
- エ 好恵をグループから締めだそうと思っていたのに、クラス中を敵に回さないためには好恵を受け入れるしかないということ。

問五

- ④「彼女に欠けていた何か」とありますが、「好恵」がクラスのみんなからの支持を得るために足りなかったものは何だと考えられますか。その内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 母親の意地悪にも耐える健気さ
- イ 女子たちからの共感
- ウ 質素な家庭に生まれてしまった不幸
- エ 明るい性格の裏にある弱さ

問六 —— ⑤ 「自分のうかつさに思い至った」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「うかつ」とは「計画の段階で先を見通す力が欠けていること」を意味しますが、「私」のどのような点が「うかつ」だったのですか。その説明をした次の文の () に三十字以上四十字以内の言葉を入れて答えなさい。

復讐計画を立てた時には () ということを見通すことができずに、みんなの意見に同意してしまったこと。

(2) 実際にこの計画を実行した結果、「私」はその後自分の誕生日まで気の重い日々を過ごすことになりました。その理由を四十字以上字五十字以内で説明しなさい。

問七 —— ⑥ 「自転車は私を好恵の家へ運んだ」とありますが、「私」が受けとったその包みには贈り主の名前は書かれていません。それなのに「私」はどうして送り主が「好恵」だと分かったのですか。その理由を自分で考えて答えなさい。

問八 次の選択肢は本文中の~~~~①から~~~~④の表現の特徴を説明したものです。その内容として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ① 「電話とは一家に一台、家族の集う部屋の電話台に鎮座しているものだった」からは、みんなが携帯電話を持ち歩いている現代とは異なり、電話は家族が集うリビングの一角を占めているものだったという当時の時代背景が読み取れる。

イ ② 「心ゆくまで怒りをぶちまけた」からは好恵の誕生会でたまった不満を母や姉に愚痴をこぼしただけでは満たされない「私」が、他にも話し相手を見つけ怒りのままに話すことで、不満を解消しようとしている様子が読み取れる。

ウ ③ 「甘いケーキの味はとうに忘れ、苦い後味ばかりが残っていた」は、十歳の誕生会を思う存分楽しめなかった「私」が好恵を仲間外れにしたことに対する反省の思いを募らせていく様子を表現している。

エ ④ 「風も、地面も、すべてが私をそこへ運んでいく気がした」は好恵がプレゼントを用意していたことを知り、いても立ってもいられなくなった「私」が、好恵の元に向かう様子を擬人法を用いながら表している。

☐ ③ 次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 千利休せんりのきゅうは茶道さどうのガンソと言われる。
- ② 話し合はなしかいは、シユウシユウがつかなくなった。
- ③ この本は一読するカチがある。
- ④ 子どもが広場ひろばでアバあれている。
- ⑤ さまざまなクフウをこらす。
- ⑥ ここがシアンしあんのしどころだ。
- ⑦ 人権じんけんの尊重そんじゆうは日本国ケンポウにっぽんこくけんぽうの要かなめだ。
- ⑧ 起死きじカイセイのホームランを打つ。
- ⑨ 成人式せいじんしきに美しく装まう。
- ⑩ 印いんに従したがって、生地きじを裁きつ。
- ⑪ 遠浅とんせんの海岸かいがんで泳およぐ。
- ⑫ 早起せうしきは三文さんもんの徳とくだ。

